

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 20 年度派遣報告書

ーカメルーン・ヤウンデ第 1 大学、バクエレ語、派遣期間(H20.11.30—H21.3.2)ー

平成 20 年 3 月入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
山口 亮太

自身の研究テーマについて

文化人類学では、近年のアフリカにおける宗教的な諸実践の復興が取りざたされるようになって久しい。それは特に、妖術や邪術といったものにフォーカスしている。これらの議論は、未だ近代化の洗礼を受けていない（ように見える）人々の営為を拾い集めるというよりは、アフリカの諸社会は既に近代化と資本主義化を経た後の社会であるということに自覚的である点で過去のものとは一線を画している。その中では新しい社会状況が新しい妖術・邪術の実践を生み出しており、そういった実践は

「近代とそれに対する不満についてのもっとも洗練された儀礼的言説」[Comaroff and Comaroff, 1993, xv-xvii]、すなわち近代に対して何事かの不満を表明し、物語る行為であり現象であるとされるのである。

しかし、果たして妖術や邪術は何かを物語るものなのであろうか。確かに、それを観察する人類学者にとっては何かを物語るものかもしれない。しかし、それらを行う当の本人たちが近代への不満や不安を物語るために行っているとするにはかなり無理がある。このような近年の妖術・邪術の研究では定石となっている主張は、現地の人々というよりはむしろそれを観察している人類学者の言いたいことが色濃く反映され、表明されたものではないか。またこれらの議論は、新しい妖術や邪術を生み出す経済的・政治的背景について声高に主張するが、その社会における邪術や妖術がどのような性質をもったものであるのかという点についてはほとんど議論されないということも共通している。

世界的な経済動向や国家の政策といった大きな次元の話は一先ず横に置いて、日々の生活の中で妖術・邪術がどのようにあられ、どのように人々に認識されているのかというごく基本的な部分を執拗に追求することがこれらを解明する第一歩であると考えている。

研修言語の概要

バクエレ語はカメルーン東南部、Dja 川流域に住むバクエレ人によって話される言葉である。言語系

統的にはバンツー系諸語に含まれ、Makaa-njem group の一つ Konabem の系統の言語の一つとされる。

バクエレ人は漁撈と農耕を生業とし、Dja 川流域以外にもコンゴ共和国北部、ガボン北部などにも存在する。独自の文字は持たず、辞書や文法書はいまだ制作されていない。

語学研修の内容について

語学研修の講義はヤウンデ第1大学で行われた。期間は2週間であり、その間は毎日2時間、土曜日にも特別に授業が行われた。内容は、アフリカの諸言語の中でも特にバンツー系諸語の言語的特徴を学ぶ構造言語学であった。バンツー系諸語の母音、子音、名詞・動詞などの構造、文法上の諸特徴などである。講義に参加したのは私一人であり、英語で行われた。



ヤウンデ市街



講師とヤウンデ第1大学文学部前で

このように、講義自体は特定の言語に特化したものではなかったため、講義とは別にバクエレ語話者からのバクエレ語のレクチャーをうけた。レクチャーを行ってくれた人物はバクエレ語を理解し話すこともできるが、バクエレ人ではなかったため、その内容は短い単純な文章でいかに自分のやりたいことを伝えるかという、会話中心の実践的なものであった。文法なども一応必要最低限は教えてもらったが、そういったものは後から自然と分かってくる、というのが彼の持論である。その後、彼の親戚でもあるバクエレ人の男性からもっと本格的なバクエレ語を教えてもらう予定であったが、私が体調を崩しマラリアにかかったため数日しか彼からレクチャーを受けることはできなかった。



バクエレ語の先生(左)

研修期間中に印象に残った体験や経験

今回の研修では講義と同時に研修言語の単語及びその音声データの収集も行うことになっていた。音声データの収集は取り立てて問題ないかと思われたが、実際に行ってみると普段は大きな声で喋る人でもボイスレコーダーを向けられれば緊張してしまいうらしく、小さな声になってしまい結果的に非常に聴きにくいデータとなってしまった。また辞書が存在しないため、単語の表記をどのようにするかで苦心した。レクチャーを引き受けて下さった二人は学校教育を受けており文字が書けるが、特徴的な鼻音や破裂音の表記ができるわけではない。また、私自身も言語学の素養があるわけではない。彼らはアルファベットで書いてくれたが、音からうける印象と表記が異なる点も多々あり、またトーンも考慮しなければならないため単語の表記は常に頭の痛い作業であった。

目標の達成度や反省点について

バクエレ語は私にとって全く未知の言語であり、辞書も文法書もないため自力で学ぶこともできないという非常に高い壁であるように私には思われた。しかし、今回の派遣を経て一応自分の要求を伝えるところまではできるようになった。現在と未来の出来事に関しては一通り文法も理解できたので、単語をもっと覚えれば簡単な会話もできるようになると思われる。しかし、やはりまだ調査助手やフランス語の助けを借りる必要があることは間違いない。また、今回の派遣の期間中で過去の出来事に言及する方法はついに分からないままとなってしまった。しかし、大学での講義でバンツー系諸語の特徴という一応の目安を習ったため、次回に長期調査を行った際にはそれらに注意してバクエレ語の習得に励みたい。

参考文献

Comaroff, J. and John Comaroff (1993) "Introduction," in Comaroff, J. and J.L. Comaroff (eds.), *Modernity and Its Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa.*, Chicago: The University do Chicago Press, pp. Xi-xx xvii.

浜本満 (2007) 「妖術と近代—三つの陥穽と新たな展望」, 阿部年春・小田亮・近藤英俊 (編) 『呪術化するモダニティ—現代アフリカの宗教的実践から—』, 風響社, 東京.